

第18回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展覧会企画提案書

アーカイブを駆動せよ

建築雑誌100年から浮かび上がるコンステレーション

[基本構想]

これからの建築へ、アーカイブを駆動させる

日本には、世界でも稀に見る数の建築雑誌が生まれ、建築家たちと伴走してきた長く厚い歴史がある。現在まで続く最初の建築雑誌が日本に誕生したのは1925年のことだ(現日本建築学会の『建築雑誌』を含めれば1887年まで遡れるが、本企画では学会機関誌、企業広報誌ではなく出版社が発行した雑誌を対象とする)。以来、多くの日本の建築雑誌が、建築という概念の考究と普及に努めてきた。戦後間もない頃には新しい住宅像を研究し発表する場をつくり、時代のメルクマールとなる建築作品の誕生を伝え、批評の対象へと昇華させた。建築シーンを動かす論争を誌上で展開させたこともあった。日本の建築雑誌は、その誌面を、編集者が建築家、建築史家、批評家たちと共につくり上げることで、単なる記録以上の機能を担ってきたのだ。それによって建築雑誌は、建築作品がひとつひとつ単独に存在しているのではなく、歴史の中の存在であることを今もなお語るものである。

しかし、建築雑誌は今、世界中でクライシスを迎えている。ネットメディアで あらゆる情報をフラットでスピーディーに得ることのできる環境においては、 編集された雑誌メディアから知見を得る機会は極端に減りつつある。もはや、 建築雑誌の役割は終わったのだろうか。

その前に確認しておくべきは、そもそも「雑誌=magazine」とは何なのかである。「情報の庫」を語源とする magazineは、いろいろなコンテンツが納められていることを意味する。しかし、その「magazine」を「雑」の語と共に訳

した日本では、単なる「情報の庫」以上にそこに多様性という意図を含ませた。 実際、日本のarchitectural magazine=建築雑誌は、揺らぎやさまざまな 関係性を拒まず、思想背景がさまざな人が席につく議論のテーブルをつくろう としてきた。それを再確認しつつ、建築雑誌が時間をかけて蓄積してきたも のをアーカイブとしてとらえ直した上で、今こそそれを駆動させるべきだという のがこの企画の基本構想である。ヴェネチア・ビエンナーレが機関アーカイブ を2008年に創設したように、作品の発表の場として議論を醸成し歴史の証 人であり続けてきた者は、アーカイブを構築する責任があるはずだ。

対象となるアーカイブは、1925年に創刊した『新建築』を中心に、この100年に刊行された日本の建築雑誌全体。展覧会では、建築雑誌というアーカイブを用いてこそ浮かび上がってくる12のさまざまな視点=コンステレーションを通じて、日本の建築の楽しみ方を紹介する。建築雑誌が目撃したものをパスで繋ぐとことは、アーカイブに歴史の厚みがあるからこそ可能になる。その試行からは、雑誌をつくり続ける営為にこそ意義と価値があることが分かるだろう。

これにより、日本の建築の多彩さを確認でき、建築雑誌のこれからの役割 も明らかになるはずだ。そして、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館 という絶好の場を通じて、手に手を取り合ってきた建築家と建築雑誌が、今 後どのような関係を取り結ぶのかも問いかけられることになる。

[展覧会構成]

会場内部

100年の資料体の星空に、12のコンステレーションを編む

主たる展示構成は、100年の建築雑誌のアーカイブから、キュレーターチームが、建築家や研究者にヒアリングをしながら編む12のコンステレーションである。

- ・キッチンとジェンダー
- 選ばれなかった写真
- ・時代を動かしたコンペティション
- 饒舌なイラストレーション
- ・初出と現在
- ・建築家の伴走者

- ・自力建設の精神
- ・弔いの空間
- 建築雑誌の経済指標
- ・支えた広告誌面
- ・雑誌が展開した論争
- 建築家とオリンピック

なぜ「コンステレーション」か。それは、建築雑誌の膨大な記事や資料を見渡し見つけたものを時代も空間も横断しながらパスで繋ぐことが、無数の星が浮かぶ夜空から星座を見出してきたことになぞらえることができるからだ。星座を形成するパスが、人の関心に基づいて引かれることもあれば、星空の中のいくつかの輝きに導かれて結ばれることもあったように、アーカイブによるコンステレーションもさまざまな関係性の中から見出せる。今回の12のコンステレーションは、日本の建築の歴史を包括的に見せるものではない。建築雑誌のアーカイブを効果的に駆動させることのできる視点として、今回、導き出すものである。

展示内部では、ひとつのコンステレーションはひとつのテーブルを持ち、その大きさはそれぞれ異なる。星座を構成する星の等級が異なるように、大小の事象、写真、図面、論考、広告といった異質な資料が結ばれる。なお、雑誌上のテキストは基本的に日本語で長いものも多いが、サマリーとその英訳をつくったうえで、グラフィックデザインを施すことで、ひとつひとつのコンステレーションが来場者に強く記憶に残るようにする。

これら12のコンステレーションの生成の「地」には、他のコンステレーションの生成を待っている星空があることが実感できるように、会場内部の壁面には、100年にわたり発刊された日本の建築雑誌が展示されその量感が現れる。床には、雑誌をつくり出す素材である、膨大な写真、図面・原稿資料、それを保管する倉庫の様子をコラージュした写真を貼ることを検討している。

ピロティ

コンステレーション・ワークショップ

ピロティでは、建築雑誌のアーカイブをデジタル技術を用い活用する提案を 行う。あくまでも本展のために試験的につくられた技術であり、来場者の参 加を促す場であることから、これを内部展示に付随するワークショップと位 置づける。

展示はふたつのコンテンツで構成する。ひとつは、既にデジタル化されている100年分(開幕までで1,152冊)の『新建築』のアーカイブデータを回遊できるアプリケーション。来場者が自らのスマホなどから会場のWi-Fiに接続し、このアプリでアーカイブを回遊すると、その結果がコンステレーションとしてヴィジュアライズされる。これによりコンステレーションの生成は、ひとりひとりに委ねられていること、そしてそれはデジタル技術により以前より遙かに容易になっていることを直観的に実感できる。なお、Wi-Fiに繋がないケースや、使い方を分かりやすく示すために、アプリを使用している画面のデモ映像①も投影する。

もうひとつは、建築家、研究者、アーティストなどにアーカイブデータを閲覧してもらったりアプリを体験してもらったりしながら行うインタビューの記録映像②である。建築雑誌から受けた影響、アーカイブに期待することについて発言してもらい、建築アーカイブの意義と活用についての議論が深まることを目指す。ふたつの映像コンテンツ①②はオンライン上でも公開し、会場に赴けない人も体験できるようにする。また、ピロティに設けるスクリーンやテーブル・椅子は、リアルな議論の場所にもなる。期間中日本はもちろん、アーカイブを所蔵する機関とオンラインで繋いでレクチャーやシンポジウムを行い、さまざまなアーカイブによるライブなコンステレーションが生成されることを目指す。



展示室内部。大小さまざまな12のテーブル並ぶ。壁面には建築雑誌100年分を展示。



ピロティ下。柱にスクリーンを貼り、インタビュー映像とウェブシステムを投影。



アプローチからの外観。エントランスに吉阪隆正の日本館の初掲載時の誌面を大きくプリント。コンステレーションのひとつ「初出と現在」が会場自体にも生きることを見せる。

[チーム構成]

チームは、建築雑誌100年のアーカイブから、空間に魅力的なコンステレーションを再編集することを念頭に置き構成する。プロジェクトを統括するキュレーター。アーカイブを調査し、建築家や研究者の支援を得ながら12のコンステレーションを編み展示コンテンツにするコ・キュレーター。豊富なコンテンツを会場に空間構成する建築家、全体のグラフィックをまとめるデザイナー。また、アーカイブを駆動するコンステレーションという理念を会場=オンサイトとは別のかたちで体験できるシステムをつくるウェブデザイナー。紙とデジタル両面を、さまざまなかたちで建築や展覧会に関わってきたメンバーによるチームである。



キュレーター 西牧厚子 新建築住宅特集編集長



コ・キュレーター 保坂健二朗 滋賀県立美術館ディレクター



コ・キュレーター 内藤麻美 新建築副編集長



会場構成 西澤徹夫 西澤徹夫建築設計事務所



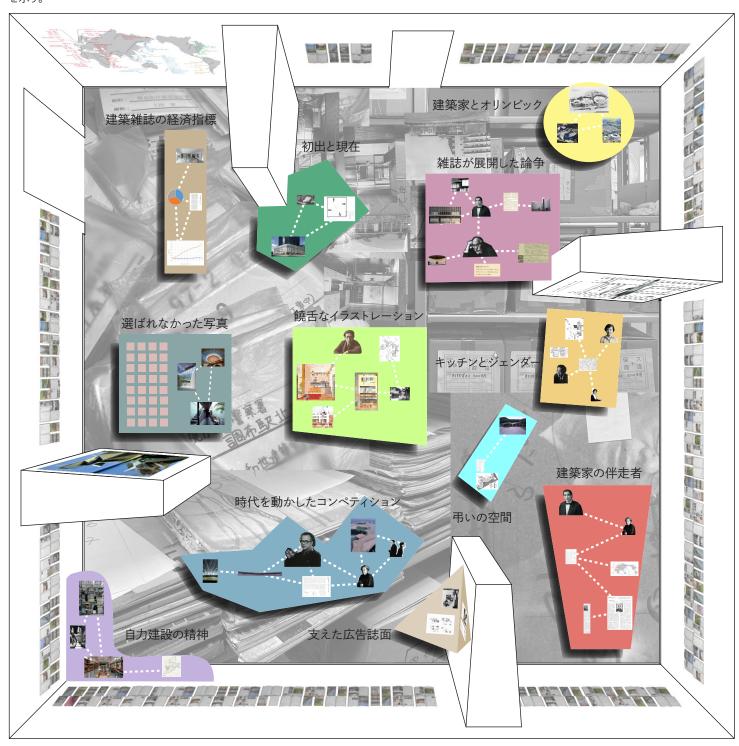
グラフィックデザイン 岡﨑真理子

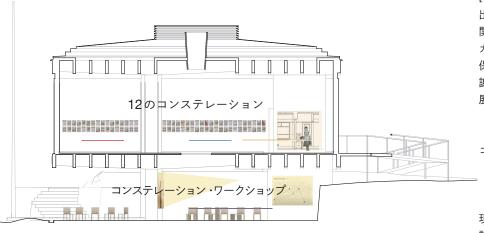


ウェブデザイン 萩原俊矢

[会場構成]

実際の誌面だけでなく、写真・図面・原稿など雑誌を構成する要素をさまざまに分解して繋いだものがテーブルに載る。来館者は12のテーブルを自由に渡りながら、知り得なかった情報に行きあたったり、意外な点が歴史を横断して結ばれていくことを体験することになる。アーカイブが、それぞれの視点で多彩に駆動できることを示す。





[予算]

出展作品輸送費 —————	¥2,500,000
関係者旅費———	¥2,000,000
カタログ制作費――――	¥2,000,000
保険料	¥500,000
謝金 —————————	¥1,500,000
展示施工費	
出力など	¥2,000,000
床·壁·展示台—————	¥10,000,000
コンテンツ制作費	
記事作成 (翻訳費含む)、映像——	¥1,500,000
	¥1,000,000
ウェブシステム――――	¥2,000,000
現地管理運営費	¥15,000,000
計	¥40,000,000